室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

日本語から見たアイヌ語の時間量と進展を示す時間副詞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2024-05-15 キーワード (Ja): アイヌ語, 時間副詞, 事態の存続と進展, 事態の起動, 時間量 キーワード (En): 作成者: 馬, 長城 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/0002000212

北海道言語文化研究
No. 22, 59-78, 2024.
北海道言語研究会

日本語から見たアイヌ語の時間量と進展を示す時間副詞

馬　長城

Time Adverbs Indicating Duration and Progress in Ainu Language from a Japanese Perspective

MA Changcheng

要旨：本稿ではアイヌ語の「時間関係の副詞」を、事態存続の時間量を表すもの、時間の中での事態の進展を表すもの、起動への時間量を表すものの三種類に分け、それらの意味と構文の特徴について記述した。事態存続の時間量を表す時間副詞は、形式上バリエーションが多く、構文上、動作動詞と共起する場合はその動作の持続時間を、変化動詞と共起する場合はその変化した結果の持続時間を表す。時間の中での事態の進展を表す時間副詞には、「uweepakta（だんだん）」、「usimne（日一日）」などがある。これらの時間副詞は変化動詞と共起する場合、変化の漸進的進展を表し、動作動詞と共起する場合は繰り返しの意味で解釈されることがあり、事態の進展性を示す。起動への時間量を表す時間副詞には、アイヌ語で「nisapno（急に）」、「ekuskonna（突然）」、「oykesne（しまいに）」などがあり、これらは各々異なる時間の長さを示しながらも、事態の起動や取り掛かりまでの所要時間量を表す。

キーワード：アイヌ語、時間副詞、事態の存続と進展、事態の起動、時間量

1.　はじめに

一般的に、文法カテゴリーのテンスは過去、現在、未来といった大まかな時間枠を提供するが、時間副詞はより具体的な時間の指定を可能にする。例えば「明日」、「来週」、「昨年」といった副詞は、時間軸において発話時点からの特定の時間距離を示す。これにより、聞き手は話し手が参照している正確な時間点や期間を容易に把握できる。そして、文法カテゴリーのアスペクトは事態の完了性や持続性を示すが、時間副詞はこれをさらに具体化する機能を持っている。例えば、「ずっと」、「しばらく」などの時間副詞は、事態がどれくらいの期間続いたか、または続くかを示す。そのため、時間を表す副詞の類（以下、時間副詞と呼ぶ）は、テンス、アスペクトといった文法形式に加えて、言語の時間表現において重要な役割を果たすと考えられる。

アイヌ語はテンスを有しない言語であり（田村 1997：12）、形態論的範疇のアスペクトも存在しない（田村 2003）。アイヌ語における時間表現に関しては、佐藤（2008）が指摘するように、副詞の組み合わせによって過去、現在、未来を示すことが多く、副詞句が重要な役割を担っている（佐藤 2008：184、191）。しかしながら、アイヌ語の時間副詞や時間副詞句[1]に関する研究は服部（1964）と佐藤（2008）の記述的な研究を除き、ほとんど見当たらない。さらに、服部（1964）と佐藤（2008）の研究は語彙レベルでの意味の記述にとどまり、時間副詞の体系性に関する分析は行われていない。

日本語の時間副詞に関する研究成果を踏まえると、文における時間副詞は、テンスとアスペクトの観点から、「時の状況成分」と「時間関係の副詞」に分類できる。「時の状況成分」とは、時間軸上での事態の出現・存在する位置を示す時間副詞である。一方、「時間関係の副詞」は、事態そのものの有している時間的性格から引き出されたものとしての、時間の中での事態の出現や展開や存在のありようという、事態の内的な時間的特性に関わるものである（仁田 2002：201-202）。紙面の制約により、アイヌ語のテンスに関連する「時の状況成分」の時間副詞については別の論文で取り扱い、本稿ではアイヌ語のアスペクトに関連する「時間関係の副詞」を記述する。

現在、アイヌ語のいずれの方言においても話者数は少なく、実地調査は極めて困難である。そこで、本稿では実地調査を行う代わりに、これまでに公開されているアイヌ語の言語資料を研究データとする。公開されているアイヌ語の資料のうち、沙流方言の資料は最も豊富であり、また、沙流方言と地理的に近い千歳方言のデータは筆者にとって入手しやすいため、本稿は沙流方言と千歳方言のデータを合わせて議論を行う。

なお、アイヌ語のデータは雅語で語られる韻文物語と日常語で語られる散文物語に分けられる（知里 1973[1954]：156）。本稿は記述的な立場から、散文物語のうち、自然会話に近い uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）、ukoysoytak（会話）の三種類を基礎データとして使用する。

2.　先行研究

先述の通り、アイヌ語の時間副詞を含む時間表現に関する記述は、主に服部（1964）と佐藤（2008）の研究において見られる。

服部（1964）にはアイヌ語の十方言から選ばれた基本的な語彙や表現を集めた方言辞典が含まれており、その中には「tane[2]（今）」、「esir（さっき）」、「ohonno（長い間）」、「iruka（ちょっと）」など、時間に関する 90 の項目がある。しかし、これらの時間に関する項目は特定

[1] アイヌ語においては、文法機能に基づき、動詞、名詞、連体詞、副詞、接続詞、助詞、間投詞の 7 種類の品詞が区別されている（田村 1997：12）。本稿では便宜上、時間を示す名詞や副詞、それらが組み合わさった語彙類を、広義に「時間副詞」と呼ぶことにする。

[2] 本稿で引用した「tane」の原語では、「e」の上にアクセント記号「´」が付与されている。この記号はアイヌ語においてアクセントを示すものであり、記号が付いた音節は相対的に高く発音されることを意味する。しかし、本稿の主題はアイヌ語のアクセントに関するものではないため、明瞭さを優先し、引用時にはアクセント記号「´」を省略している。この省略は以降の例文にも適用される。

の意味や文法的基準ではなく、頻出度などを基にした編者の主観的な判断で選ばれたものである。そのため、この記述は各方言の基礎語彙を記述したものにすぎず、アイヌ語の時間副詞の網羅的な記述ではない。

佐藤（2008）は「時間副詞」の項を設け、アイヌ語における時間の表現においてこれらが重要な役割を担っていると述べている。しかし、佐藤（2008）は「tane（今）」、「tap（今、つい今しがた）」、「esir（さっき）」、「teta（この間）」、「teeta（昔）」、「tanto（今日）」、「numan（昨日）」、「nisatta（明日）」という 8 つの時間を表す語彙について、例文を用いながらその意味を記述しているが、それ以外のテンスの意味を表す時間副詞、およびアスペクトの意味と関わる「時間関係の副詞」に関しては触れていない。

また、服部（1964）と佐藤（2008）以外にも、田村（1997）や中川（2013）がアイヌ語の時間副詞に触れてはいるものの、詳細な記述はなされていない。すなわち、アイヌ語における時間副詞の使用に関する研究は現段階、語彙レベルでの記述があるものの、その体系的な分類や文法的な機能に関する分析はまだ不十分だと言える。

時間副詞をより細かく分類し、種類ごとに記述して体系化する研究は日本語の研究成果においてはすでに見られる。したがって、アイヌ語の研究においても、時間副詞を体系化する試みは可能であり、またそれは必要でもある。本稿はアイヌ語の時間副詞のうち、アスペクトの意味と関わる「時間関係の副詞」を体系的に記述し、それらの時間副詞の構文的な役割を明確にすることを目的とする。

3. 日本語の時間副詞に関する研究成果

仁田（2002）は文レベルでの日本語の時間関係の副詞を含む副詞全体を記述している。この中で、時間と関係する副詞は「時の状況成分」、「時間関係の副詞」に分類されている。「時の状況成分」は時間軸上での事態の出現・存在する位置を示し、テンス的な過去、現在、未来を表す時間副詞である。例としては「今日」、「来週」、「当日」、「翌週」、「1980 年」、「紀元 4 世紀頃」などが挙げられる。一方、本稿が扱う「時間関係の副詞」は、事態そのものの有している時間的性格から引き出されたものとしての、時間の中での事態の出現や展開や存在のありようという、事態の内的な時間的特性に関わるものである。さらに、以下の「事態存続の時間量」を表すもの、「時間の中における事態の進展」を表すもの、「起動への時間量」を表すものの三種類に分けられる。

① 事態存続の時間量を表すもの：当該事態がいかほどの時間量を占めて持続・存在するのか（しているのか）を表す副詞的成分である。これには「ずっと」、「永遠に」、「しばらく」、「ちょっとの間」などがある。

② 時間の中における事態の進展を表すもの：時間の展開に従って進展していく事態の進展のあり様、そして、そのことを通して、事態の進展の時間的あり方を表す副詞的成分である。これには、「次第に」、「だんだん」、「すこしずつ」、「ひましに」などがある。

③　起動への時間量を表すもの：事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実現するまでの所要時間量に関する副詞的成分である。これには、「すぐ」、「突然」、「急に」、「ようやく」などがある。（仁田 2002：229-258 に従って筆者が要約）

本稿では、この日本語の研究成果に基づき、アイヌ語の「時間関係の副詞」を上記の三種類に分けて考察する。ただし、日本語の分類モデルがアイヌ語の時間副詞に完全に適用可能であるとは考えていない。アスペクトの意味に関わる時間副詞は、事態の内的な時間的特性、すなわち事態の出現、展開、存在の様態を反映する。これらは一般に上述の三つのカテゴリーに分類されることが多いが、本稿ではこの分類をアイヌ語に適用する際、便宜上の参考として用いることを予め断っておく。

4.　アイヌ語の時間関係の副詞について

第 3 節で見られたように、日本語の「時間関係の副詞」は「事態存続の時間量」を表すもの、「時間の中における事態の進展」を表すもの、「起動への時間量」を表すものの三種類に分けられる。以下、アイヌ語の「時間関係の副詞」をこの分類に従って記述していく。

4.1.　事態存続の時間量を表す時間副詞

先に述べたように、事態存続の時間量を表すものは当該事態がいかほどの時間量を占めて持続・存在するのか（しているのか）を表す副詞的成分である。アイヌ語においては、その形成方法よって、便宜的に「時間名詞との組み合わせで時間量を表す時間副詞、時間名詞以外の要素より構成される時間量を表す時間副詞、「時間名詞＋wano（から）＋時間名詞＋pakno（まで）」によって表す時間副詞の 3 種類に分けることができる。以下では、この順番で事態存続の時間量を表す時間副詞を記述していく。

4.1.1.　時間名詞との組み合わせで時間量を表す時間副詞

アイヌ語では、時間量を表現するために、時間名詞と数連体詞や後置副詞などを組み合わせる方法が用いられることがある。筆者の調査したデータでは、この組み合わせは概ね「数連体詞＋時間名詞」、「（数連体詞＋）時間名詞＋後置副詞/名詞/動詞」の 2 種類に大別される。

まず、「数連体詞＋時間名詞」という形式から見ていく。アイヌ語の数連体詞には「sine（一つの）」、「tu（二つの）」、「re（三つの）」、「ine（四つの）」、「asikne（五つの）」、「hempak（いくつの）」などがある。一方、アイヌ語には、時間単位を表す名詞（以下、時間名詞と呼ぶ）は「ancikar（晩）」、「to（日）」、「cup（月）」、「pa（年）」がある[3]。例（1）～（3）が示しているように、時間名詞は理論的に数連体詞と組み合わされ、時間量を表す時間副詞

[3] 時間単位「icicikan（時間）」は日本語の「一時間」からの借用語である。田村（1996：217）には語彙レベルにおける「sine icicikan（一時間）」、「tu icicikan（二時間）」、「henpak cikan（何時間）」の記録があるが、筆者の収集したデータにおいては実際の用例は見つからなかった。そのため、ここでは議論を控える。

として働く[4]。

（1）oro　ta　re　ancikar oka=as[5].
そこ　に　三つの 晩　いる.PL=1PL.SBJ
「そこで三晩滞在しました。」（AA 研-「川上まつ子・浜田隆史独話 2」-26）[6]

（2）orano　hempak　to　ka　hempak　to　ka　turano　an=an.
それから いくつの　日　も　いくつの 日　も　と一緒に　いる=1SG.SBJ
「それから何日も何日も一緒にいた。」（国語研コーパス-K8109171UP-79）[7]

（3）humne tu　cup re　cup　ø=an[8],
時に　二つの　月　三つの　月　3SG.SBJ=いる
humne sine　pa ø=an　wa ø=arpa
時に　一つの　年 3SG.SBJ=いる　て 3SG.SBJ=行く
「（彼は）ときには二、三ヵ月滞在し、
ときには一年滞在して（帰って）行った。」（田村 1996：209）

例（1）では数連体詞「re（三つの）」が、時間名詞「ancikar（晩）」と組み合わされ「三晩」という時間量を表す。例（2）では疑問数連体詞「hempak（いくつの）」と時間名詞「to（日）」の組み合わせによって、「何日」という不定時間量が表されている。例（3）では、数連体詞「tu（二つの）」、「re（三つの）」、「sine（一つの）」はそれぞれ時間名詞「cup（月）」、「cup（月）」、「pa（年）」と組み合わされ、「二カ月」、「三カ月」、「一年」という時間量を表している。これらの時間副詞は時間量を表すため、共起する動詞はある程度持続することが求められる。例（1）～（3）における事態はすべて状態性動詞[9]「an/oka（いる/いる（複数形））」によって表されているため、先述の時間副詞と問題なく共起できると考えられる。

---

[4] アイヌの文学作品においては時間量を表す場合には、「sine ancikar tu ancikar（一晩二晩）」、「tutko rerko（二三日）」、「tu cup re cup（一カ月二ヶ月）」、「otu pa re pa（二三年）」のような慣用表現が存在する。いずれも「数連体詞＋時間名詞」のパターンに分類されるが、慣用表現であるため、本稿では詳しく議論しない。

[5] 本稿では例文を引用する際に、アイヌ語に加えて日本語訳文も引用している。アイヌ語例文およびグロスにおける人称接辞を「＝」で、他の形態素境界を「－」で示している。また、日本語訳文における「,」と「.」をそれぞれ「、」と「。」に統一した。

[6] 本文中で見やすくするため、本稿は出典の情報「AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト アイヌ語資料「川上まつ子さん口演・浜田隆史聞き起こし・訳注：isoytak イソイタク 独話 2」-26）を「プロジェクト名」略称-「作品名/番号」略称-行数の形式で略記する。以下、この表記方法を継続する。

[7] 出典情報は「国立国語研究所アイヌ語口承文芸コーパス-K8109171UP-79」の略記である。

[8] アイヌ語の動詞は義務的に人称が表示される。ただ、3 人称の標示はゼロ形態の接辞で表される。本稿では、そのことを見やすくするために 3 人称接頭辞を「ø=」で表示することにする。また、本稿で引用した例文における人称接頭辞を示す「=」、形態素の間の「-」、グロス、時間副詞と動詞における下線はすべて筆者によるものであり、誤りはすべて筆者の責任である。

[9] アイヌ語における「状態性動詞」と「非状態性動詞」の区別についての詳細は中川（1981：131-132）を参照。

次に、時間量を表す「(数連体詞＋）時間名詞＋後置副詞/名詞/動詞」形式を見ていく。この形式における「後置副詞/名詞/動詞」は、それぞれ一部の時間名詞の後ろに立ち、より細かい時間量を表現することがある。これには、後置副詞「epitta（じゅう)」、「pakno（ぐらい)」、「akkari（以上)」、名詞「emko（半分)」、動詞「okere（終わる)」がある。

後置副詞「epitta（じゅう)」は、「to（日)」、「pa（年)」の後ろに立ち、その対象の時間量全体を指す。

（4）to　epitta　ø=nepki　kor ø=an
日　じゅう　3SG.SBJ=働く　て　3SG.SBJ=いる
「(彼は）一日いっぱい（一日じゅう）働いている。」（田村 1996：110）

（5）huci　kamuy　iyayraykere.　tan　pa　epitta　utat　turano
おばあさん　神　有難う　この　年　じゅう　人々　と一緒に
totek=an　no asir pa ø=ek　etokus　ruwe ne　na.
元気=1PL.SBJ.INCL　て　新年　3SG.SBJ=来る　もうすぐ　の　COP　SFP
「火の神様よ、ありがとうございます。今年中、みんなと共に私達は
健康で新しい年がもうすぐ来るところなのですね。」（佐藤 2008：192）

例（4）の「epitta（じゅう)」は時間名詞「to（日)」と組み合わされ、「一日いっぱい」という時間量を表す。例（5）は例（4）と同じ方法で「一年間」という時間量を表す。これらの場合においても事態が持続性を持ったものでなければならない。例(4)の動作動詞[10]「nepki（働く)」は持続を表す形式「kor an」と共起しており、また、例（5）の事態「totek（元気である)」は状態性動詞であるため、どちらも持続性のある事態と見なすことができる。

「epitta（じゅう)」は理論的には、「ancikar（晩)」の後ろに立ち、日本語の「一晩中」に相当する表現を形成すると思われるが、実際のアイヌ語には「ancikar（晩)」＋「epitta（じゅう)」という形式は存在しない。「一晩中」という意味は例（6）のように名詞語根「an（夜)」＋「epitta（じゅう)」の形で表される。

（6）ha:,　ø=irampotarare,　an-epitta　ø=isomomokore
ああ　3SG.SBJ=やかましい　夜-どおし　3SG.SBJ=誰も眠らせない
「ああ、こやかましい、夜どおしだれも眠らせない。」（田村 1996：12）

「isomomokore（誰も眠らせない)」は否定動詞であり、状態性動詞と見なすことができる。「isomomokore（誰も眠らせない)」という事態は「an-epitta（一晩中)」という時間量の中に持続していることがわかる。この場合、「epitta（じゅう)」もその時間量全体を表していると

[10] 本稿では、動作動詞と変化動詞というアスペクト視点からの動詞分類について、工藤（1995）と佐藤（2006）の研究を参照している。

言える。

また、「epitta（じゅう）」は季節を表す名詞「mata（冬）」の後ろに立ち、「冬じゅう」という意味を表すことがある。

（7）mata epitta e=e pakno kim ta ka aep a=hoppa.
冬 じゅう 2SG.SBJ=食べる ほど 山 に も 食べ物 1SG.SBJ=を置いていく
「冬中食べるだけのものを山の中においてきた。」（国語研コーパス-K7908032UP-73）

例（7）にある事態「e（食べる）」は持続可能な動作動詞であるため、時間量を表す時間副詞「mata epitta（冬じゅう）」と問題なく共起できる。そして、ここでも前述の時間副詞と同じく、「mata（冬）」の後ろに立つ場合、その名詞の全体の時間量を表している。

ところが、「epitta（じゅう）」は「to（日）」、「pa（年）」、「mata（冬）」の後ろに立つが、「to（日）」、「pa（年）」と同じ系列の時間名詞「cup（月）」および季節を表す名詞「paykar（春）」、「sak（夏）」、「cuk（秋）」の後ろに立つことはない。この現象を言語学の類推という観点からすると、「時間名詞＋epitta」という構造は「to（日）」と「pa（年）」に限定されるわけではなく、「cup」でも文法的に受け入れられるはずである。しかし、実際には「cup」での使用例は見られず、これは語用論的あるいは文化的な要因も影響している可能性が高い。この点についての詳細な議論は、別稿に譲ることとする。

その他、「epitta（じゅう）」は名詞の後ろだけではなく、形式名詞節と動詞節の後ろに立ち、それらの節が表現する時間量の全体を指すことがある。

（8）pon=an hi epitta, (a) a=yuputari a=saha,
小さい=1SG.SBJ の 間 1SG.SBJ=の兄たち 1SG.SBJ=の姉
i=y-ukoomap kor oka=an ayne
1SG.OBJ=挿入音-一緒にかわいがる て いる.PL=1PL.SBJ あげく
「私が小さかった間はずうっと、兄たちや姉に
かわいがられていましたが、」（田村 1989：10-11）

（9）yay-sukup epitta ene an yay-cis-te patek a=ki
REFL-成長する 間 このような REFL-泣く-CAUS ばかり 1SG.SBJ=する
「私は自分が成長する間じゅう、自分を嘆かせることばかりした。」
（アイヌ語調査研究事業報告書：18-4-242[11]）

例（8）における「epitta（じゅう）」は形式名詞「hi（の）」の後ろに立ち、形式名詞句が表

[11] アイヌ語調査研究事業報告書とは、平取町立二風谷アイヌ文化博物館「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」のアーカイブ資料のことを指す。「18-4」はアイヌ語データの番号であり、「-242」は筆者が付けた行番号である。

す期間を示す。例（9）における「epitta（じゅう）」は自動詞「yaysukup（自分が成長する）」の後ろに立ち、その動詞句が持続する期間を示す。例（8）においても例（9）においても、「epitta（じゅう）」によってある期間の時間量が示されたため、主文の事態には持続できるものが求められる。例（8）の「ukoomap（一緒にかわいがる）」は状態性動詞で、持続可能な事態であり、例（9）の「ki（する）」も動作動詞で、持続可能な事態である。

次に、後置副詞「pakno（ぐらい）」について見てみよう。「pakno（ぐらい）」は日本語の「ほど」に相当し、「数連体詞＋時間名詞」によって構成される時間量を表す形式の後ろに立ち、そのおおよその時間量を表す。

（10）re　to　pakno ekimne　a=tura　wa　arpa =an
三つの　日　ほど　山へ　1PL.SBJ=を同伴する　て　行く=1PL.SBJ
「三日ほど私たちは一緒に山仕事に行って」（国語研コーパス-OI990317UP-83）

（11）sine　cup pakno mosma　irawketupa poka
一つの 月　ほど　他の　仕事　を
a=ki　kor, an=an　ruwe　ne　awa,
1SG.SBJ=する　て　いる=1SG.SBJ の　COP　が
「ひと月ほど他の仕事をして暮らしていましたが」（田村 1989：64-65）

例（10）にある「re to pakno（三日ほど）」と例（11）にある「sine cup pakno（ひと月ほど）」はそれぞれの事態の時間量を表している。しかし、例（11）の持続可能な事態「ki（する）」に対して、例（10）の事態「arpa（行く）」は主体変化動詞であり、動作自体が持続できるものではない。この場合、「re to pakno（三日ほど）」は主体変化動詞が変化した結果の持続期間を表すことになる。

後置副詞「akkari（より）」は、「数連体詞＋時間名詞」という構造の後ろに立ち、その構造が表す時間量以上という意味を表す。

（12）ruwe ne　hine, sine　cup　akkari, a=ko-moyre-moyre　ruwe ne.
の　COP　て　一つの　月　より　1SG.SBJ=に対して-遅れる-遅れる の　COP
「そうして、ひと月以上も遅れてしまいました。」（田村 1989：64-65）

（13）asikne　to　akkari iteki　e=an　na
五つの 日　より　PROH　2SG.SBJ=いる　SFP
「五日間以上（山に）あなたはいてはいけません。」
（アイヌ語調査研究事業報告書 2-9-112）

例（12）における「akkari（より）」は「sine cup（一か月）」の後ろに立ち、一か月

以上の時間量を示している。この場合、共起する動詞が持続する事態でなければならないが、「moyre（遅れる）」は変化動詞であり、それ自身は持続することができない。そのため、「sine cup akkari（一か月以上）」は「moyre（遅れる）」が変化した後の結果が持続した時間量を示すことになる。例（13）の「akkari（より）」は「asikne to（五日間）」の後ろに立ち、持続事態「an（いる）」の持続時間量が五日間以上であることを表す。

続いて、名詞「emko（半分）」について見てみよう。「emko（半分）」はその前に立つ名詞の半分の時間量を表す。

（14）upas ø=as korka to emko e-tutko
雪 3SG.SBJ=降る けれど 日 半分 で-二日
pakno ne kor nep ka ø=isam
ぐらい COP て 何 も 3SG.SBJ=ない
「雪が降るけれど 1 日半位たつと何もなくなる（消えてしまう）。」
（田村 1996：96）

（15）tane sine pa emko ka ø=ohasir-hoppa pe ne kusu
もう 一つの 年 半分 も 3SG.SBJ=家を留守にする もの COP ので
「もう半年も家を留守にしていたので。」（田村 1996：456）

例（14）の「to emko etutko」は「1 日半」という時間量を表し、例（15）にある「sine pa emko」は半年という時間量を表す。これらの時間副詞はそれぞれの文の中でコピュラ「ne」と状態性動詞「ohasir-hoppa（家を留守にする）」の持続期間を表す[12]。

最後に、動詞「okere（終わる）」と時間名詞が組み合わされる例を見てみよう。

（16）to ø=okere ø=sinot kor ø=an.
日 3SG.SBJ=終わる 3SG.SBJ=遊ぶ て 3SG.SBJ=いる
「（彼は）1 日中遊んでいる。」（田村 1996：715）

（17）tapne tapne mata ø=okere paskur utar ø=oka
このように 冬 3SG.SBJ=終わる カラス たち 3SG.SBJ=いる
kuskeraypo siknu=an wa ek=an.
おかげで 生きる=1SG.SBJ て 来る=1SG.SBJ
「このように冬の間ずっとカラスたちのお陰で、死なずに済み戻ってきた。」

[12] 田村（1996：96）によると、日本語の「半月」に相当する表現として、アイヌ語には「cup emko」がある。しかし、本稿で収集したデータでは、「cup emko」の例文は見つからなかったため、それについての考察はここでは控える。

（AA 研-「川上まつ子・山田慎太郎 12」-150）

例（16）と（17）が示しているように、動詞「okere（終わる）」は時間名詞「to（日）」と「mata（冬）」の後ろに立ちうる。この場合、その日あるいは冬が終わったという意味ではなく、それぞれ「一日中」、「冬の間」という時間量を表す。例（16）にある「sinot（遊ぶ）」は動作動詞であり、持続可能な事態である。例（17）にある「siknu（生きる）」は持続期間を持つ動詞であるため、こちらも持続可能な事態である。ただし、本稿で収集したデータでは、「okere（終わる）」と共起する時間名詞は「to」と「mata」の二種類のみであった。「okere（終わる）」が同じ系列の時間名詞「ancikar（晩）」、「cup（月）」、「pa（年）」の後ろに立ち、時間量を表すことができるかどうかは、更なるデータを収集した上で、議論する必要がある。

以上、「数連体詞＋時間名詞」および「（数連体詞＋）時間名詞＋後置副詞/名詞/助動詞」の形式の時間副詞を見てきたが、アイヌ語にはこれらの形式にあてはまらない、日本語の「夏の間」と「冬の間」に相当する時間量を表す「時間名詞＋時間名詞」の表現もある。

（18）<u>sakpa</u>　ø=pirka　wa ø=<u>tanne</u>
夏の間　3SG.SBJ=良い　て　3SG.SBJ=長い
「夏の間が良くて長い（春早く雪が消え、秋遅く霜が来る）」（田村 1996 : 600）

（19）tanpa <u>matapa</u>　ø=<u>takne</u>
今年　冬の間　3SG.SBJ=短い
「今年は冬が短い（秋霜が遅く、春の雪どけが早い）」（田村 1996 : 696）

例（18）の「sakpa（夏の間）」と例（19）の「matapa（冬の間）」はいずれも「季節を表す名詞＋pa（年）」の形式になっている。いずれの例においても、持続可能な状態性動詞「tanne（長い）」、「takne（短い）」が持続する時間量を表す。しかし、この形式は「sakpa」と「matapa」の 2 種類のみで、本稿のデータでは「cuk（秋）」と「paykar（春）」が「pa（年）」と共起する例は見つからなかった。言語学の類推という概念に基づけば、「cuk（秋）」と「paykar（春）」も「pa（年）」と共起する可能性があるはずだが、実際にはそのような例が確認されていない。この現象は、語用的および文化的な要因によるものである可能性が高い。詳細な議論は別稿で行う予定である。

4.1.2.　時間名詞以外の要素より構成される時間量を表す時間副詞

前節の時間名詞を中心に構成される時間副詞と異なり、本節では数連体詞と時間名詞以外の要素より構成される時間量を表す時間副詞を記述する。以下では、持続時間量が長いと思われるものから順に見ていく。

日本語の「永遠」、「いつまでも」、「ずっと」という意味に相当するものはアイヌ語には、名詞「sasuysir（永遠）」と不定位置名詞「ney（どこ）」によって構成される 2 種類の時間副詞句が存在する。

まず、「sasuysir（永遠）」によって構成されるものには、「sasuysir pakno（いつまでも）」と「sasuysir unno（いつまでも）」の 2 種類がある。

（20）sasuysir pakno sasuysir pakno a=e=epunkine ka ki kus ne na
いつまでも いつまでも 1SG.SBJ= 2SG.OBJ=を守る もする つもり SFP
「いつまでも私はお前を見守りもしよう。」（アイヌ語調査研究事業報告書 17-6-138）

（21）sasuysirun no a=poho eci=e-pirka kusu ne ruwe ne na
いつまでも 1SG.SBJ=の息子 2PL.SBJ=で-良い つもり の COP SFP
「いつまでも私の息子であなたたちは幸せになるでしょうよ。」
（AA 研「川上まつ子・浜田隆史民話 7」-225）

例（20）の「sasuysir pakno（いつまでも）」と例（21）の「sasuysir unno（いつまでも）」が表す時間量は極端に長いものである。ゆえに、それらの時間副詞と共起する事態も持続する事態でなければならない。例（20）における事態「epunkine（守る）」は持続可能な事態である。例（21）の動詞「pirka」は状態性動詞と解釈する場合のほか、変化の意味である「よくなる」としても解釈することができる。そのため、例（21）における「sasuysir unno（いつまでも）」が表すのは、変化動詞「pirka」が変化した結果の持続期間として理解することができる。

次に、不定位置名詞「ney」にから構成される長い持続時間量を表す時間副詞句を取り上げる。これには、実際の会話の中で、格助詞「ta（に）」、後置副詞「pakno（まで）」、副助詞「ka（も）」などと組み合わせて、「ney ta pakno/ney ta ka pakno/ney pakno/ney pak/ney ta ne yakka/ney ta an kor/nen pakno/ney pak an yak/ney pak an yakka」などのように、多くのバリエーションが存在する。

（22） ney pakno ø=hotke wa ø=an
いつまでも 3SG.SBJ=寝る て 3SG.SBJ=いる
「いつまでも寝ていた。」（国語研コーパス-OI990223UP-12）

（23）ney ta pakno ø=nisasnu mintum e=kor wa e=an nankor na
いつまでも 3SG.SBJ=健康である 体の調子 2SG.SBJ=持つ て 2SG.SBJ いる だろう SFP
「どうかいつまでも健康な体を持っているんですよ（＝いなさいよ）」（田村 1996：405）

例（22）にある「ney pakno（いつまでも）」は長い時間量を表すため、持続的な事態を必要

とする。しかし、例（22）における動詞「hotke（寝る）」は変化動詞であり、それ自身は動作持続を表すことができない。「ney pakno（いつまでも）」はこの動詞と共起する場合、その動詞が変化した後の結果の持続しか表せない。ゆえに、この文においては結果持続を表すアスペクト形式の「wa an」と共起することになった。例（23）における動詞「kor（持つ）」は例（22）の「hotke（寝る）」と同じく変化動詞であるため、「ney pakno（いつまでも）」はその変化した結果の持続時間を表すことになる。この場合も持続を表すアスペクト形式「wa an」と共起している。

そして、アイヌ語には日本語の「長く」、「長い間」に相当する時間副詞「ohonno」と「setakko」がある。このうち、「setakko」を語根とするいくつかの複合形式「eorsetakko/semsetakno/setakko/orsetakko ki/eossetakko」が存在する。

（24）k=eyamno　ku=mi　yakun　ohonno ku=mi
1SG.SBJ=大事に　1SG.SBJ=着る　なら　長く　1SG.SBJ=着る
「大事に着れば長い間着られる（長もちする）」（田村 1996：149）

（25）setakko　soy　ta　e=an　hi　ka　k=eramiskari
長い間　外　に　2SG.SBJ=いる　の　も　1SG.SBJ=知らない
「ずいぶん長い間あなたが外にいたとは私は知らなかった。」（田村 1996：619）

例（24）の「ohonno（長い間）」は「mi（着る）」という変化動詞の動作が持続する期間を表すのではなく、変化した結果である「身に着けている」という状態の可能な持続期間を表している。例（25）の「setakko（長い間）」は状態性動詞「an（いる）」が表す事態の持続期間を示している。

また、アイヌ語には日本語の「ちょっとの間」、「僅かの間」、「あっという間に」に相当する時間副詞が存在する。これには、主に「iruka」によって構成される時間副詞句と「setakno」がある。「iruka」によって構成されるものには「iruka poka/ iruka ne yakka/iruka ne kor/iruka ne tek kor/iruka siran kor/iruka siran tek/iruka siran tek kor/irukatumta（iruka tom ta）」のように、いくつかの組み合わせが挙げられる。

（26）iruka　cire　tek
短い間　ゆでる　ちょっとする
「さっと湯通ししなさい。」（田村 1996：58）

（27）iruka tom ta　ø=e　okere　pa　akusu ora,
あっという間に　3PL.SBJ=食べる　終える　PL　ので　それから
「あっという間にたいらげてしまった。すると」（国語研コーパス-K8010291UP-248）

例（26）にある「iruka...tek」と例（27）にある「iruka tom ta」はすべて比較的短い時間量を表すものであるが、共起する事態は持続可能なものでなければならない。例（26）における動詞「cire（ゆでる）」は持続可能な動作動詞であるため、「iruka...tek」はその動作自体が持続する時間量を表している。例（27）の動詞「e（食べる）」も持続可能な動作動詞で、「iruka tom ta」は「e（食べる）」という動作の持続時間量を表している。

また、アイヌ語の「setakno」は日本語の「ほんの短い間」、「短時間」、「すぐ」に相当する時間副詞である。

（28）setakno　poka　sini
わずかな間　でも　休む
「せめてわずかな間でも休みなさい。」（田村 1996：619）

例（28）における事態「sini（休む）」は主体動作動詞で、持続可能な事態であり、「setakno」はその動詞が持続する時間量を表す。

最後に、アイヌ語の「ponno」は日本語の「ちょっと」、「すこし」という意味で、持続時間量を表し、「setakno」に近い働きをする。

（29）ponno　sini=an　ro
すこし　休む=1PL.SBJ.INCL　SFP
「少し休もう。」（田村 1996：638）

（30）ponno　ku=hehewpa　wa ku=inkar
すこし　1SG.SBJ=覗き見る.PL　て　1SG.SBJ=見る
「（私は）ちょっとのぞいて見る。」（田村 1996：541）

例（29）と例（30）における動詞「sini（休む）」と「inkar（見る）」は両方とも動作動詞であり、持続可能な動詞なので、短い時間量を表す「ponno（すこし）」と共起することができる。

4.1.3. 「時間名詞＋wano（から）＋時間名詞＋pakno（まで）」によって表す時間副詞

アイヌ語においては、形式「時間名詞＋wano～時間名詞＋pakno」は時間量を持つ期間を表すが、その構成要素である「時間名詞＋wano」および「時間名詞＋pakno」もそれぞれ時間量を持つ期間を表すことができる。アイヌ語の「wano」は時間的な関係を表す場合、日本語の「から」に相当し、その期間の起点を示す機能を持つ。

（31）numan　wano ku=kokkasapa　kirouske ø=arka　wa　ku=mokor　ka　eaykap
昨日　から　1SG.SBJ=の膝　関節　3SG.SBJ=痛い　て　1SG.SBJ=眠る　も　できない

「昨日から私の膝の関節が痛くて眠ることもできない。」（萱野 2002[13]：242）

例（31）の「wano（から）」は「numan（昨日）」の後ろに立ち、持続事態「arka（痛い）」が始まる時点である「numan（昨日）」を示すと共に、発話現在までの時間量も表している。一方、「pakno」は日本語の「まで」に相当し、時点を表す名詞の後ろに立ち、その期間の終点を示す機能がある。

（32）numan　pakno teta　ø=an
昨日　まで　ここに　3SG.SBJ=いる
「（彼は）きのうまでここにいた。」（田村 1996：440）

例（32）の「pakno（まで）」は不定時点より「numan（昨日）」までの期間を表し、その持続事態「an（いる）」の終点を示している。

そして、「時間名詞＋wano（から）＋時間名詞＋pakno（まで）」という形式はその文において起点と終点を持つ事態が持続する時間量を表す。

（33）numan wano, tanto　pakno,　ø=pon　katkemat tura,　usa
昨日　から　今日　まで　3SG.SBJ=小さい 女性　と一緒に　いろいろ
ø=okay　pe　c=ewkoytak　kor oka=as　ruwe tapan kusu
3PL.SBJ=いる.PL　もの 2PL.SBJ=について話し合う て いる.PL=1PL.SBJ の　COP　ので
「きのうから、今日まで、お嬢さんと、
いろいろなことを話し合っていたのですから」（田村 1984：52-53）

（34）kuneywa wano　to　noski　pak[14]　nepki=an
朝　から　日　の中央　まで　働く=1PL.SBJ
「朝から正午まで我々は働いた。」（佐藤 2008：37）

例（33）と例（34）における「wano...pakno」という組み合わせはいずれも、起点と終点を持つ期間を表し、それぞれ事態「ewkoytak（について話し合う）」と事態「nepki（働く）」が持続する時間量を示す。

また、「wano」と「pakno」は頻繁に位置名詞「te（ここ）」と組み合わされ、発話時点から、あるいは発話時点までの事態の持続期間を表す。

[13] 萱野（2002）の例文はすべてカタカナ表記を採用している。本稿ではそれらの例文を引用する際、萱野（2002）に載っているカタカナとローマ字表記の対応関係に従い、カタカナ表記をローマ字表記に直している。誤りは全て筆者に帰する。

[14] アイヌ語の会話文においては、「pak」は「pakno」の簡略形式として、「wa」は「wano」の簡略形式として使用されることがある。

（35）easir　tan　te　pakno　aynu　a=ne　wa
本当に　この　ここ　まで　人間　1SG.SBJ=COP　て
「本当に今まで、私は人間であって」（アイヌ語調査研究事業報告書 7-2-455）

（36）te　wano　anak　mat ka　a=kor　kusu ne
ここ　から　TOP　妻　も　1SG.SBJ=持つ　つもり
「これからは妻もめとります」（田村 1996：379）

例（35）にある「te pakno（これまで）」は持続事態「ne（コピュラ）」の発話時点までの時間量を表すと共に、その持続事態の終点が発話時点であることを示す。例（36）にある「te wano（これから）」は持続事態「kor（持つ）」の発話時点からの時間量を表すと共に、その持続事態の起点が発話時点であることを示す。

4.2. 時間の中における事態の進展を表す時間副詞

時間の中における事態の進展を表す時間副詞とは、時間の展開と共に、事態の内実である変化が漸次的に進行していくことを表すものである。アイヌ語には、日本語の「だんだん」、「日一日」、「すこしずつ」に相当する時間副詞が存在する。以下、それらの時間副詞を一つずつ見ていく。

まず、アイヌ語において、日本語の事態の進展を表す時間副詞「だんだん」に相当するものは「uweepakta（だんだん）」と「uweepakiun（だんだん）」がある。

（37）uweepakiun　ø=isam　kor　ø=an
だんだん　3SG.SBJ=ない　て　3SG.SBJ=いる
「（お菓子がたくさんあったが人が食べて）
だんだんなくなっていく。」（田村 1996：803）

（38）uweepakta mean[15]
だんだん 天気が寒い
「だんだん寒くなる。」（田村 1996：803）

例（37）と例（38）における動詞「isam（ない）」と「mean（天気が寒い）」は通常は状態性動詞と見なされているが、これらの例文では変化動詞と見なすことができる。しかも、これらの動詞が表す変化は持続性を持つ。時間の中で持続・展開していく変化は、漸次的にその変化の度合いを拡大させていくことになる。この場合、「uweepakta（だんだん）」と

[15] アイヌ語には「完全動詞」と呼ばれる動詞が存在する。完全動詞は文法上、それ自身の中に主語と述語を内蔵し、他に主語も目的語も補語もとらない動詞を指す。例（38）の「mean」は「完全動詞」の一例である。

「uweepakiun（だんだん）」は事態「isam（ない）」と「mean（天気が寒い）」の変化の進展性を表す。

そして、日本語の「日一日」に相当するものとしてアイヌ語には「usinne」がある。

（39）a=po　utari　ka　na　usimne　ø=rupne　pekor　ikipa　wa
1SG.SBJ=子供　たち　も　まだ 日一日　3SG.SBJ=大きい のように する.PL て
「子供たちもまだ日に日に大きくなるかのようでいて」
（アイヌ語調査研究事業報告書 7-2-540）

（40）usimne　usimne　ø=hetuku
日一日　日一日　3SG.SBJ=成長する
「一日一日と成長する。」（田村 1996：187-188）

例（39）における動詞「rupne（大きい）」は例（37）と例（38）における「isam（ない）」と「mean（天気が寒い）」と同じタイプの変化動詞と見なすことができる。この場合、時間副詞「usimne（日一日）」は「rupne（大きくなる）」という変化の漸次的な進展を表す。例（40）の動詞「hetuku」は「出る」という意味の変化動詞である。例（39）と同じように、「usimne（日一日）」は「hetuku（成長する）」という変化の漸次的な進展を表す。

また、アイヌ語の「ponno ponno」は日本語の「すこしずつ」に相当する時間副詞である。

（41）ponno　ponno　k=ukaosmare　nen poka　nen poka　ø=ki　ayne,
すこし すこし 1SG.SBJ=ためる なんとかして　なんとかして 3SG.SBJ=する　あげく
「少しずつ私は貯金を何とかしてしたら」（AA 研「川上まつ子・浜田隆史独話 2」-113）

（42）wakka　ponno　ponno　ø=ta　wa　ø=ukaosmare
水　すこし　すこし　3SG.SBJ=汲む て　3SG.SBJ=ためる
「水を少しずつ汲んでためる。」（田村 1996：753）

例（41）と例（42）における「ponno ponno（すこしずつ）」は事態「ukaosmare（ためる）」の量性を表し、量的副詞として解釈することが可能であるが、「ukaosmare（ためる）」を時間軸の上で展開していく事態と見なす場合、「ponno ponno（すこしずつ）」はその事態の繰り返しとしても解釈できる。この場合、「ponno ponno（すこしずつ）」は事態の進展性を表す時間副詞と認めることができる。

4.3. 起動への時間量を表す時間副詞

起動への時間量を表す時間副詞とは、事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実現するまでの所要時間量に関わるものである。アイヌ語には、「nisapno（急に）」、「ekuskonna

（突然）」、「nani（すぐ）」、「tane（すぐ、まもなく）」、「tane tane（まもなく）」、「oykesne（とうとう、しまいに）」などがある。

まず、「nisap/nisapno（急に）」、「ekuskonna（突然）」、「nani（すぐ）」のような、意味的に事態への取り掛かりまでに要する時間量が少ないものから見ていく。

（43）nisapno　apto　ø=as　humi an
急に　雨　3SG.SBJ=降る　の　COP
「急に雨が降ってきた。」（田村 1996：423）

（44）ekuskonna　apa　ø=maktektek
突然に　窓　3SG.SBJ=ぱっと開ける
「（彼は）突然戸をガラガラッと開けた。」（田村 1996：709）

（45）esir　ø=ek　korka　nani　ø=arpa
さっき　3SG.SBJ=来る　けれど　すぐ　3SG.SBJ=行く
「（彼は）さっき来たけれどすぐ行った。」（田村 1996：405）

例（43）にある「nisap/nisapno（急に）」は事態「as（降る）」が始まるまで、所要時間が極めて少ないことを示している。例（44）の「ekuskonna（突然）」は事態「maktektek（ぱっと開ける）」が起動するまでの時間がわずかだということを示している。例（45）の「nani（すぐ）」は事態「arpa（行く）」が起動するまで、所要する時間量が僅少だということを示している。これらの時間量を表す時間副詞はいずれも、突然性と唐突性に関わり、事態の起動・取り掛かりまでの所要時間が極めて少ないことを表している。

アイヌ語の時間副詞「tane」は実際の会話において、日本語の「すぐ」に相当する時間量の短いものと、「間もなく」に相当するある程度時間量を持つもののいずれかに解釈できる。

（46）tane　k=arpa　na
すぐ　1SG.SBJ=行く　SFP
「すぐ行くから。」（田村 1996：695）

（47）tane　ø=ek　nankor
まもなく　3SG.SBJ=来る　だろう
「間もなく来るであろう。」（萱野 2002：295）

例（46）と例（47）における「tane」が意味的に「すぐ」と解釈されるか、「まもなく」と解釈されるかは、話者の主観的な感覚に依存するが、いずれも事態「arpa（行く）」と「ek（来る）」が起動するまでの所要時間を表していることには変わりがない。「tane」が表す時間量は

絶対的なものではないが、一般的に先述の時間副詞群と後述の時間副詞群の中間的な存在と見なすことができるだろう。

次に、事態の起動まである程度の時間量を持つ時間副詞を見てみよう。まず、「tane tane」は「tane（すぐ）」が重ねられた形式で、「ほどなく」と訳されることが多い。

（48）tane tane　ø=ek　nankor
ほどなく　3SG.SBJ=来る　だろう
「ほどなく来るであろう。」（萱野 2002：295）

例（48）における「tane tane（ほどなく）」は事態「ek（来る）」が起動するまでの所要時間を表している。この所要時間が「tane」と比べて長いのか短いのかは判断しにくいが、いずれにせよ、一定程度の長さの所要時間を要するだろう。

次に、アイヌ語において、ある程度期間が長いと考えられるタイプの時間副詞「oykesne（しまいに）」を見てみよう。

（49）ø=poon　icen　ka　ø=eneociscisre　oykesne
3SG.SBJ=とても少ない　お金　も　3SG.SBJ=使ってしまう　しまいに
a=e　kusu ø=an　ø=poon　antuki
INDEF=食べる　ため　3SG.SBJ=ある　3SG.SBJ=とても少ない　小豆
ka　ø=eiyok　rusuy
も　3SG.SBJ=売る　たい
「少しの銭も使ってしまって、しまいに食べるためにある少しの小豆
も売りたいの？」（萱野 2002：165）

（50）kam ø=e　yakka ø=wen　uske　i=y-e-re,
肉　3SG.SBJ=食べる　でも　3SG.SBJ=悪い　ところ　1SG.OBJ=挿入音-食べる-CAUS
cep ø=e　yakka ø=wen　uske　i=y-e-re
魚　3SG.SBJ=食べる　でも　3SG.SBJ=悪い　ところ　1SG.OBJ=挿入音-食べる-CAUS
rok　ayne　oykesne,　a=i=ipe-re　katu
PRF.PL　あげく　しまいに　INDEF=1SG.OBJ=食事する-CAUS　様子
ka　ø=isam　no　an=an.
も　3SG.SBJ=ない　て　いる=1SG.SBJ
「肉を食べても、私に悪いところを食べさせ、魚を食べても、私に悪いところ
を食べさせてばかりいたのですが、しまいには、ろくに
食べさせてくれなくなりました。」（田村 1985：8-11）

例（49）における「oykesne（しまいに）」は事態「eiyok（売る）」が起動まである程度長い

所要時間が必要であったことを示している。ある程度長い時間の経過を経て、その事態が起動・実現したというように捉えられる。例（50）における「oykesne」は事態「ipere katu ka isam（食べさせてくれなくなった）」が起動・実現するまで、非常に長い時間を要したことを示している。

5. まとめと課題

本稿は日本語の「時間関係の副詞」に関する研究成果を参照し、アイヌ語の「時間関係の副詞」を「事態存続の時間量を表すもの」、「時間の中における事態の進展を表すもの」、「起動への時間量を表すもの」の三種類に分け、それらの意味と構文の特徴について記述した。

事態存続の時間量を表す時間副詞は形式上、更に「時間名詞との組み合わせで時間量を表す時間副詞」、「時間名詞以外の要素より構成される時間量を表す時間副詞」、「時間名詞＋wano（から）＋時間名詞＋pakno（まで）によって表す時間副詞」の 3 種類に分けることができる。このうち、「時間名詞との組み合わせで時間量を表す時間副詞」はバリエーションが多いが、理論的に可能な結合形式が存在しないものもある。事態存続の時間量を表す時間副詞は動作動詞と共起する場合、その動作の持続する時間量を表し、変化動詞と共起する場合、その変化した結果の持続する時間量を表す。そして、アイヌ語には時間の中における事態の進展を表す時間副詞は日本語と比べてそれほど豊富ではないが、「uweepakta（だんだん）」、「uweepakiun（だんだん）」、「usimne（日一日）」、「ponno ponno（すこしずつ）」などがある。これらの時間副詞は変化動詞と共起する場合、変化の漸次的進展を表し、動作動詞と共起する場合、繰り返しの意味でして解釈されることがあり、その事態の進展性を表す。また、起動への時間量を表す時間副詞は、アイヌ語には「nisapno（急に）」、「ekuskonna（突然）」、「nani（すぐ）」、「tane（すぐ、まもなく）」、「tane tane（ほどなく）」、「oykesne（しまいに）」などがある。これらの時間副詞は自身が表す時間の長短は異なるものの、いずれも事態の起動・取り掛かりまでの所要時間量を表す。

以上、本稿はアイヌ語の「時間関係の副詞」の体系的な記述を試みたが、データが限られているため、「時間名詞＋epitta（じゅう）」、「時間名詞＋okere（終わる）」、「時間名詞＋pa（年）」の構造など、議論できなかった問題も少なくない。これらは今後の課題としたい。

謝辞

*本研究は公益財団法人ヒロセ財団第 9 回研究助成（課題名「「アイヌ神謡集」の中国語訳注および対照言語学的な研究」、研究代表者：馬長城）の助成を受けたものである。また、本稿の内容に関して 2 名の査読者の方々より貴重な助言をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

略語一覧

1,2,3	1st, 2nd, 3rd person	1,2,3 人称	PRF	perfect	完了
CAUS	causative	使役	PROH	prohibitive	禁止

COP	copula	コピュラ	REFL	reflexive	再帰
INDEF	indefinite	不定人称	SBJ	subject	主格
INCL	inclusive	包括	SFP	sentence final particle	文末助詞
OBJ	object	目的格	SG	singular	単数
PL	plural	複数	TOP	topic	主題

参考文献：

平取町立二風谷アイヌ文化博物館（2013-2015）「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」報告書 http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/culture/language/story/ [2023 年 11 月アクセス] .

知里真志保（1973/1954）「アイヌの神謡」(『知里真志保著作集』1.153-222. 東京: 平凡社 所収)

服部四郎（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店.

萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典（増補版）』東京: 三省堂.

国立国語研究所（2016-2021）「アイヌ語口承文芸コーパス―音声・グロス付き―」https://ainu.ninjal.ac.jp/folklore/[2023 年 11 月アクセス] .

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』東京: くろしお出版.

中川裕（1981）「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習』81: 131-141.

中川裕（2013）『ニューエクスプレス　アイヌ語』東京：白水社.

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版.

佐藤知己（2006）「アイヌ語千歳方言のアスペクト–kor an、wa an を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12: 43-67.

佐藤知己（2008）『アイヌ語文法の基礎』東京: 大学書林.

田村雅史（2003）「アイヌ語におけるアスペクトに関する従来の記述の概観」『itahcara（イタハチヤラ）』1: 17-24.

田村すず子（1984）『アイヌ語音声資料 1』東京：早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子（1985）『アイヌ語音声資料 2』東京：早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子（1989）『アイヌ語音声資料 6』東京：早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京: 草風館.

田村すず子（1997）「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典コレクション: 日本列島の言語』1-88. 東京: 三省堂.

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（2014-2019）「AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト」https://ainugo.aa-ken.jp/ [2023 年 11 月アクセス] .

執筆者紹介

氏名：馬　長城（マ　チョウジョウ）

所属：北海道大学文学研究院

Email：machangcheng168@gmail.com